

風景歌人黒人の一特質

石井庄司

高市黒人といえば、すぐ巻三の旅の歌を思う。

旅にして物恋しきに山下の赤のそほ船沖に漕ぐ見ゆ（二七

〇）

の一首は、いうまでもなく旅先の実景描写である。参河あたりの山から海をながめている。沖に向かつて赤い船が漕いで行くのが見える。それが、なんとなくなつかしく慕わしく、心引かれるというのである。この歌を誦する今もなお、われわれは、「沖に漕ぐ見ゆ」ですつと視線が引かれていくのである。

四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無し小舟（二

七二）

四極山も、笠縫も所在については、参河国とか撰津国とか諸説がある。どちらでもいい。とにかく作者は、いま四極山を越えて、沖に見える笠縫の島にかくれてゆく棚無し小舟に心を引かれている。巻一にも

何処にか船泊てすらむ安礼の崎漕ぎたみ行きし棚無し小舟

（五八）

というのがあつた。沖を漕ぎ行く舟をじつと見すえている感じである。そして「漕ぎたみ行きし……」ですつとこちらへ引かれていつている。棚無し小舟の小さいすがたがよいよよ小さく消えて行く思いがする。

風景歌人としての黒人としての作は、多く遠景をうたつている。しかも、これは、遠ざかり行く景色であつて、なんとなく心細い感じである。

同じ時代の人麿はどうであらうか。巻三の旅の歌を見る。

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に舟近づきぬ（二五

〇）

であつて、今まで遠くに見えていた淡路島が大きく近く見えに来るのである。

稲日野も行きすぎがてに思へれば心恋しき可古の島見ゆ（二五三）

天さかる夷の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

(一五五)

というように、みんな見えてくるよろこびでいっぱいである。

銅飯の海の庭よくあらし刈ごのみだれ出づ見ゆ海人の釣

船 (二五六)

は、にぎやかに漁船が出ているのである。ところが黒人の作になると、

墨吉の榎津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆ出づる船人 (二八

三)

は、ずつと出て行つてしまふのであつて、そこには船はないのである。ちらばつて見えている(散在)のに対して、一方は、出て行つてしまつて(出航)いて、見えなくなつてしまふのである。

人麿は、

日並の皇子の命の馬並めてみ獵たたしし時は来向かふ (四

九)

といったものがあるのに対して、黒人は、そういうものがない。志貴皇子が

岩はしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりける

かも (一四一八)

と歌い、持統天皇が

春すぎて夏来るらし白たへの衣ほしたり天の香具山 (二一八)

といつたりするような、張りのあるものは、黒人にはないよ

うである。

黒人が旅の作の一つの

桜田へ鶴鳴きわたる年魚市瀉潮干にけらし鶴鳴きわたる

(二七一)

は、後の赤人の

和歌の浦に潮満ち来れば瀉を無み芦辺をさして鶴鳴きわた

る (九一九)

と比較されるのである。赤人の先輩としての黒人の位置をはつきりさせようという意見も出る。両者はたしかによく似た題材である。そして、赤人よりも黒人の方が時代が先とすれば赤人の歌の徳についても、いくらかの割引が必要となつてくるというのであろうが、私は、この両者を、そう簡単に考えるべきではないと思う。まず両者を比較していただきたい。

黒人の作では「桜田へ鶴鳴きわたる」とはじめにあり、そして「年魚市瀉潮干にけらし」と来る。ところが、赤人の作は、まず、「和歌の浦に潮満ち来れば」とあり、「芦辺をさして鶴鳴きわたる」は、あとになつてゐる。「潮干」と「潮満」のちがいがあつた。鶴が場所を移る動作については、かわりはないかもしれない。しかし、その原因となつたところ、黒人の作は、潮が引いて行くのである。赤人の作は、潮が満ちて行くのである。題材も光景も似ているが、見つけどころ、もの生命の押さえたかたには、ちがいがあつたのではない。黒人には

黒人の特色があり、赤人には赤人の特色があつて、どちらが
良いか、なかなか判断に苦しむ。とにかく、黒人という人は、
こういう人である。

四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無し小舟(二
七二)

と比較されるのは、赤人の

鳥がくりわが漕ぎくれば羨しかも大和へのぼる真熊野の船
(九四四)

である。赤人の作は、自分も船に乗つていて動いてゐるの
で、真熊野の船の影がすぐ消えて見えなくなるといふことが
なく、はつきり見えてゐるのである。「棚無し小舟」に対し
て「真熊野の船」というのは大きくて丈夫な感じがする。船
形がはつきりしているのである。そう心細いという気はしな
いのである。

何処にか吾は宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば

(二七五)

は、同じく旅の歌の一首であるが、まことに心細い歌であ
る。ひとりぼつちのさびしい境地である。さきにあげた「何処
にか船泊てすらむ」(五八)は、人の身の上について思ひや
るのであつた。さびしいことは、さびしいが、こんどは、わ
が身の上に迫つて来て、さて、どこに泊ろうかというのは、
まことに切実なものである。孤独と寂寥というものを、じつ

とこらえてゐるような作である。さびしさをあるじとする
いつた近世の人にも近い境涯であつて、古代では珍しいの
はないか。

妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる

(三七六)

は一本に

三河の二見の道ゆ別れなばわが背もわれもひとりかも行か
む

とある。「わが背」といふことばからすれば、妻の作で、二
首は問答となるのではないかと思われるが、「別れかねつる」
などと、かなり思いきつて、自分の寂しい気持を言いあらわ
している。「わが背もわれもひとりかも行かむ」といふこと
がたまらなくつらいと思われるのである。

はや来ても見てましものを山城の高の槻群散りにけるかも

(二七七)

またしても、「散りにけるかも」である。散つてしまつたもの
に対する愛惜である。こういう気持につながるものは、巻一
の近江の旧都をいたむ作である。これは、異伝のあるもの
で、「高市古人」とあり、「或書云高市連黒人」とあるもの、
おそらく同一人であろう。

いにしへの人にわれあれやささなみの古き京を見れば悲し

も(三二一)

ささなみの国つみ神のうらさびて荒れたる京見れば悲しも
(三三)

の二首は、人麿の長歌に比すもべくもない。旅の歌のようなものでなく、理屈があり、ことわり「感動の振幅が小さく、表現が狭い」と評されようが、黒人のような孤独な人によつては、こういう歌いかたしかできなかつたとも云えるのではなからうか。「国つみ神のうらさびて」というのは、一種の神話ではあるが、一途に、古き京、荒れたる京、すぎて行つたものに対する悲歎の情を述べたものとして、味わうべきではないかと思う。旅の歌の作者とは別人のような気がするという意見もあるが、要するに、こうした抽象的なものは不得手であつたのではなからうか。

黒人の面目は、やはり、旅の作家、風景歌人というところにあつた。風景が美として感ぜられるのは、例の「山のあなたの空遠く」の詩のように、かなたの空に思ひを馳せる憧憬であるといわれている。そういう意味に於いて、風景に美を見出し、それを正しく歌いあげた作家はおそらく黒人が最初であろう。人麿とちがひ、赤人とも変つた自然の深奥に到達した作家は、絶後ではないかと思う。

日本抒情詩論

日本近代詩の創造エネルギーとしてつねにその根底に脈打っている記紀、歌謡、万葉のうたごころを日本抒情詩の根源的基盤として発生史的且つ文芸学的方法によつて掘り下げたユニークな労作

青木生子著
A5判 370頁
価600円 千50

古代文芸に於ける愛

—その本質と展開—

青木生子著
B6判 300頁
価300円 千50

アテネ文庫古典解説シリーズ

古事記	倉野 憲司	蜻蛉日記	秋山 虔
日本霊異記	松浦 貞俊	枕草子	池田 亀鑑
古今集	窪田章一郎	源氏物語	早坂 礼吾
伊勢物語	松尾 聰	更級日記	関 みさを

東京神田駿河台 弘文堂 振替東京 53909